



# 新連携・地域資源活用・農工商連携

## 伝統的な漆器の蒔絵技術と現代アートの融合による 筆記具やアクセサリ等の開発

独立行政法人 中小企業基盤整備機構

新事業支援部 連携事業支援課 課長代理 早川 克郎

### 紹介事例の概要

団体名 漆工芸大下香仙工房

認定事業区分 地域資源活用

認定事業名 山中塗の蒔絵技術を活用

した「色くくり蒔絵」を

ほどこした筆記具および

文具小物の商品開発・販

路拡大

認定日 平成21年9月11日

英語で「Japan」といえば「漆、漆器」を示すとおり、日本を代表する伝統工芸品、輸出品であり、かつては日本人の日常生活にも広く使用されていた漆器も、生活スタイルの変化や安価で良質な生活用品の台頭等を背景に、需要が縮小してきており、新たな取組みが求められている。

### ■大下香仙工房の成り立ち

今回ご紹介する漆工芸大下香仙工房（以下、大下香仙工房）は、石川県加賀市にあるが、ここは山中漆器の産地である。漆器の産地は全国広範囲に分布しているが、石川県は、加賀藩前田家が美術工芸を奨励していたこともあり、輪島、山中、金沢という3つの産地が形成された土地柄である。

漆器は、木地、下地、塗り、蒔絵など工程ごとに専門の職人が関わる完全な分業体制により生産される。当工房は、初代・大下雪香氏が1894年に加賀蒔絵工房を開いて以来、代々蒔絵業を専業

としてきた。しかし、蒔絵賃加工への依存から脱却し、自社による企画・デザインからの一貫生産体制の構築を目指して1979年、4代目・宗香氏が、現在の大下香仙工房を設立。茶器や棗（なつめ）など高価な茶道具を中心に生産し、消費地問屋や百貨店といった独自の販路を開拓するなど、業容も順調に推移していた。ところが、ユーザーの購買行動の変化もあり、2002～03年頃を境として、高価な茶道具の販売に陰りが見え始めるようになった。

※蒔絵（まきえ）：漆器の装飾技法の一つで、漆の特徴である接着力を利用して金粉を器物に付着させる（蒔く）日本独特の技法。

### ■茶道具から蒔絵万年筆への転換

一方、宗香氏が茶道具の個展や販路開拓の活動を通して築いた人脈が縁で、国内の万年筆メーカーから樹脂のボディに蒔絵を施した蒔絵万年筆の製作依頼があり、試行錯誤を経て、生産を開始していた。これがマスコミに取り上げられたこともあって注目され、その後、海外を含む複数の万年筆メーカーから同様の注文を得ることになる。このような経緯をたどって蒔絵万年筆の生産依頼が増加するようになり、茶道具の生産を上回る経営の転換点を迎えた。

使用する金粉の量（面積）や工程数によってコストも変わるが、蒔絵万年筆の小売価格は、安いものでも5万円以上、高いものになると100万円という高値

・高級品であった。

しかし、万年筆メーカーからは、まったくロットでの発注があるものの、定期的ではなく、経営的には不安定な状態に置かれていた。また、OEM生産であるため、仕様や価格面でもイニシアチブがとれないうえ、消費者の直接の反応が聞けないもどかしさを感じるようになり、自社ブランド商品を開発したいとの欲求を持ち始めるようになっていた。

### ■新技法・色くくり蒔絵の開発

2006年、4代目宗香氏の娘婿にあたる、5代目・香征氏が、知人から、東京で開催されるクラフトイベントに出展をしないかとの誘いを受けた。

香征氏は、東京の美術学校グラフィックデザイン科の出身であるが、消費サイクルが激しい広告デザインの世界よりも、モノを作り伝えるというワークスタイルに惹かれ、また、創作のコアになるものが伝統の仕事にあるのではないかと考え、1997年、宗香氏（当時交際していた現奥様の父親にあたる）に蒔絵を師事、現在に至っている。

このクラフトイベントには、都会的で感性の優れた人達の来場が見込まれていたため、伝統的な蒔絵技法を用いて、現代人のニーズにマッチする新たな商品提案の絶好のチャンスと捉えた。そこで開発した商品が、「色くくり蒔絵」という新たな技法により、シロクマや猫などシンプルで動物意匠を彩った蒔絵万年筆で

あった。色くくり蒔絵というのは、意匠の輪郭を金蒔絵で描き、その内側を多様な色漆で埋める「色を括り描く」ところからきた呼称で、香征氏が編み出したオリジナル技法である。金粉の使用量の低減や工程の簡略化が図られ、コストを抑えられる一方、蒔絵特有のポリウム感を損なわない利点も併せ持っていた。



色くくり蒔絵万年筆・ボールペン

これが20～40代の女性を中心に高反響を得ることに成功。また、来場していたバイヤーの目に留まり、大手通販会社での取扱や六本木のセレクトショップでの販売等、いくつもの取引が成立したこと、自信を深めることとなった。

### ■自社ブランドの確立、地域資源の認定

その後、印鑑メーカーからの依頼で、色くくり蒔絵を加飾した印章及び同ケースのセットを製作するなど、用途の広がりを見せ、色くくり蒔絵技法を用いた商品群の開発を本格的に事業の柱に据えることを決心した。

その代表作品の一つが、「NATURE series Animal pen」である。クラフトイ



“NATURE series”のキャラクターたち

ペントに出品した際にデザインした動物意匠を大幅に増やし、Animal pen 万年筆・ボールペンを自社オリジナル商品として開発した。小売価格も2～3万円程度に抑えたことで、これまで蒔絵万年筆の購入を躊躇していた方でも購入しやすくなったほか、親しい人へのプレゼントとしても適した逸品となってい

る。

また、蒔絵自体は、ガラスや磁器など硬質なもの以外の素材であれば加飾できる特性があるため、現在では、宝飾になり得る良質な天然素材を使用したブローチやペンダント等の蒔絵アクセサリを開発し、「Classic Ko」という自社ブラ



蒔絵アクセサリ

ンドで展開を始めている。このような、山中漆器、蒔絵という地域資源を応用した大下香仙工房の取組みは、色くくり蒔絵の新たな活用の視点が認められ、2009年地域資源活用事業計画の認定を受けている。

### ■自社ブランドの普及、定着

中小機構では、和のある暮らしのカタチ展「NIPPON MONO ICHI」を始め、表参道にある中小機構のテストマーケットイングショップ（当時）「Pin」への出展など、販路開拓のお手伝いをしている。来場者との具体的な商談もさることながら、消費者との接触や出展者同士の交流なども、大きな経験、財産になったとの声を聞いた。

大下香仙工房では、東京の有名百貨店での催事出展、美術館や高級ホテル内のショップでの採用、また、最近では、銀座三越の独自企画売場である「ジャパンエディション」の一角に常設の販売スペースを設けるなど、徐々にではあるが着実に、ブランドの普及や定着のための活動を進行させている。現状、OEM生産が経営の柱であることに変わりはないが、将来的には自社ブランド商品の比率を半数以上にまで高めることを目標としている。

是非、大下香仙工房のブランド商品を見かけたときは、お手に取り、品質の高さを実感していただくと幸甚である。



工房の作業風景

### ■おわりに（今回の取材をとおして）

本事業は伝統技術と現代アートの融合によるものであるが、その中心的人物である香征氏が、他所からの参入者で、伝統を守りつつも縛られず、新鮮な感性や自由な発想を組み入れたからこそ、成し得た側面があるように感じられた。もちろん、それを許し認めた先代宗香氏の度量の大きさや寛容さも忘れてはならない。また、大下香仙工房の歴史を辿ると、人の「縁」から得たチャンスを見事に手練り寄せ、事業成長の追い風になっている印象を受けた。それには本物を作る技術力と日頃の弛まぬ研鑽、更には、新しいことに挑むチャレンジ精神を秘めていたからこそと確信している。

今後の更なる成長、飛躍を期待したい。